

個人の感情方略の選択に家庭環境が及ぼす影響

○平部あずみ・安部主晃・中島健一郎
(広島大学大学院教育学研究科)

問題

本研究の目的は、個人の感情制御方略の選択に、家庭環境が及ぼす影響について検討することである。感情制御とは、個人の目標を成し遂げるため、感情を観察・評価し、そして修正する外的および内的なプロセスのことである(Thompson, 1994)。感情制御の研究では、外的・内的観点で大別したもの(Tanya, 2011)、対人的・非対人的観点で大別したもの(Einat & Simon, 2016)など、様々な観点から行われた研究が存在する。

中学生において、シンナー乱用や喫煙経験が家族との夕食頻度に関係すること(和田, 2008)や、12～17歳の子どものいる家庭において、家族で夕食をとる機会の少ない家庭の子どもは、そうではない家庭よりもシンナー等の利用経験が多くなる(Joseph et al., 2009)など、家庭環境と感情制御、特に人ではなくモノで感情制御を行うといった非対人的感情制御の関連が示唆されている。

本研究では、家庭環境が良好ではない場合は非対人的感情制御が行われるとの仮説を立て、その他については家庭環境が個人の感情制御方略の選択にどのような影響を及ぼすのかを探索的に検討していく。

方法

参加者 大学生 122名(女性 42名, $Mage=19.6$ 歳), 短大生 208名(女性 208名, $Mage=19.1$ 歳)。

手続き 参加者は2冊の質問紙(質問紙1, 2)に回答した。質問紙1, 2では、それぞれ感情制御シナリオを用いた場面想定法で特定の感情を想起させたうえで、対人的感情制御、非対人的感情制御についての質問に回答させた。また、質問紙2では、参加者の家庭環境についても回答させた。

まず、各質問紙の感情制御シナリオで想起させた感情について、質問紙1では、シャーデンフロイデを想起させた。これは、人の不幸は蜜の味、日本において“いい気味だ”、“様を見る”と表現される(澤田, 2008)。質問紙2では、ルサンチマンを想起させた。これは、上位者・支配者・強者に対し、現実の行為において反抗できないために持つ怨恨(菅野, 2012)である。

対人的感情制御の測定には、Cheung et al.(2014)の

手法に則り、感情制御のための対人ネットワーク利用を測定する emotionships の指標を用いた。非対人的感情制御の測定には、勝谷(2006)の、気晴らし、考え込み、問題解決の3因子からなる非対人的対処行動項目を用いた。家庭環境の測定については、Aron et al.(1992)の IOS 尺度を用い、家族の構成員との心理的距離を測定し、その平均と分散を分析に用いた。IOS 平均が低く、IOS 分散も小さいときに家庭環境が悪いとみなす。

結果

IOS 平均と分散、対人的および非対人的感情制御の指標を用いて相関分析を行った。相関分析の結果より、IOS 平均と対人的感情制御の指標(ルサンチマンで対人的感情制御をする、感情領域の広さ、平均人数、重複あり、重複なし)の間に正の相関が、そして IOS 分散と非対人的感情制御の指標(ルサンチマンにおいての問題解決、ルサンチマンにおいての考え込み)の間に正の相関が見られた。

以上の結果より、家庭内のメンバーとの心理的距離が近くなるほど対人的感情制御を行うこと、家庭内のメンバーとの間に、心理的距離のばらつきが大きくなると、ルサンチマンにおいて、抱いた感情の気晴らしをしたり、抱いた感情やその原因について考えたりするなど、非対人的感情制御を行うことが示された。

次に、IOS 平均と IOS 分散(いずれも中心化)を説明変数とし、感情制御(対人的・非対人的)を目的変数とする重回帰分析を実施した。主たる結果として、IOS 平均は感情制御時に利用する対人ネットワークの大きさに正の影響を及ぼした。つまり、家族との平均的な心理的距離に近いほど、感情制御時により多くの他者を求めることが示された。しかし、交互作用は認められなかった。

考察

本研究の結果は仮説を支持したとは言えないものの、家族の構成員との心理的距離の程度の違いが対人的感情制御と、そして心理的距離の分散が非対人的感情制御と関連することが明らかになった。今後は本研究で用いた以外の感情(喜び、怒りなど)でも再現されるか、検討していく必要があると考えられる。